

川崎晃一先生追悼の辞

大塚邦明

東京女子医科大学 名誉教授

川崎晃一名誉教授（九州大学・九州産業大学）は、平成26年5月13日、逝去されました。享年77歳でした。こころよりお悔やみ申し上げます。2000年頃に神経難病ALSを発症され、十数年に及ぶ闘病生活を送ってこられました。同日午後8時7分、福岡市香椎浜の老人ホームにてご親族に見送られつつ、他界されました。ご息子の川崎純也主治医のご加療と、ご家族の手厚い看護を受けられつつ、幸福な最期をお迎えになったことと、こころよりご冥福をお祈り申し上げます。

川崎教授は、1936年（昭和11年）に、福岡市博多区にお生まれになりました。九州大学医学部を卒業し、同内科学第二講座に入局されます。1973年1月から12年間、米国国立衛生研究所（NIH）へvisiting scientistとして留学され、食塩感受性という遺伝的素因が高血圧を発症させるという事実を発見されます（1978年、Am J Med）。このとき、ミネソタ大学の、Franz HalbergとErhard Hausの両教授にめぐり合い、NIHで得たその知見を、時間生物学の立場から時間治療へと展開されました。同じ12gの食塩量であっても、朝食時にその多くを摂れば血圧が上がり、一方、夕食時にその多くを摂れば血圧が下がるとの臨床報告は、刺激的で魅力十分です。そしてその成果を、ネパールでのフィールド健康科学研究に応用し発展されました。1987年～2008年までの20年間にも及ぶ、ネパール山岳地帯での食塩感受性とその遺伝学的比較研究には目を見張るものがあります。この成果がNHKの「ためして合点」（1999年1月20日）で放映されたときの、川崎教授の何かはにかんだような緊張されたお姿が思い起こされます。

1981年に、九州大学健康科学センターの教授になられてからは、「生物リズム研究会」の創設に奔走します。1983年夏、当時、国際時間生物学会の会長職にあったミネソタ大学のHalberg教授からの要望

もあり、日本にも時間生物学の議論の場をつくりたいと立志されました。直ちに九大医学部の先輩であり、当時、国会議員であった高木健太郎先生を訪ね、同年、設置準備委員会を組織され、運営委員会を発足。そして1984年12月1日に、第1回生物リズム研究会（当番世話人、大原孝吉名古屋市立大学生理学教授）を開催しました。鬼神の如くにすばやい行動力と、その決断力には舌を巻く思いです。生物リズム研究会は、毎年秋に開催され、その後順調に成長し、1993年の第10回研究会を最後に、「臨床時間生物研究会」と合併することで、1994年から『日本時間生物学会』として生まれ変わりました。そして1998年には、第5回日本時間生物学会を、福岡市健康づくりセンターで主催されました。

九州大学の教授としてローマ大学との交流を深めました。2国間共同研究などでローマ大学に3回もの短期留学をされています。また、ローマ大学のPietro Cugini教授の留学を受け入れ、健康科学に関する時間医学研究を遂行されました。その成果は、J Health Sci（1991年）に数多く報告されています。そのひとつに携帯型血圧計を用いた血圧日内変動研究があります。日本循環器学会を代表して、携帯型血圧計による血圧日内変動の日本人の正常値を定め報告（Jpn Circ J, 1999年）。その業績は、今もその基準値として用いられています。

2000年に、九州大学を定年退官（同名誉教授）され、その後、2007年迄、九州産業大学で教授職を務められますが、この頃（2000年）より、ALSという神経難病の病魔が忍び寄ってきます。十数年に及ぶその闘病生活の記録は、著書、「絆（海鳥社、2013年）」に著され、一内科医として、あるいは人として、病いと共に生きることの思い、あるいは死を 수용することの心得等が、切々と綴られています。

川崎教授が師として慕った、ミネソタ大学のFranz Halberg教授が、2013年6月9日、93歳11ヶ

月で一生を終えました。その数日後、Halberg教授の後を追うように、もう一人の師であり時間栄養学を創設したErhard Hausミネソタ大学教授が、この世を去りました。ほぼ同じ時期に、米国の時間生物学/時間医学の巨星が墜ちたことになります。そしてそれからまだ1年も経っていない、2014年5月13日、日本の時間医学を創出した、日本の巨星が去っていきました。大自然の法則に導かれた、何か宿命のようなものを感じずにはられません。

日本時間生物学会は、今、隆盛期を迎えようとしています。その1つの母体となった「生物リズム研究会」を立ち上げ、主宰され、時間生物学を時間医学へと展開し、ここまで熟成させた、川崎教授の業績は甚大であり、尊敬申し上げます。日本時間生物学会員を代表して、ここに深甚なる哀悼の意を捧げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

最後に、Halberg教授の亡き後、ミネソタ大学のHalberg Chronobiology Centerを引き継ぎ、センター長を務めている Germaine Cornelissen教授から、Halberg教授とHaus教授からのところをも込めた、川崎教授とそのご家族への言葉を戴きました。それを記しまして、追悼の言葉とさせていただきます。

It is with great sorrow that we learned about the passing of Professor Teruka z u Kawasaki. Dr. Kawasaki's relation to Minnesota and the Halberg Chronobiology Center started in the mid-1970s with the Minnesota-Kyushu Breast Cancer Study. The study designed by Franz and Erna Halberg with Teru Kawasaki was a comprehensive mapping of circadian, circatrigintan, and circannual rhythms of blood pressure, heart rate, and a number of hormones determined in blood and urine in clinically healthy women at different personal and



1998年頃 川崎教授と

familial risk of developing breast cancer later in life. Samples collected in Japan were sent to Minnesota for chemical determinations by the late Professor Erhard Haus at St Paul Ramsey Hospital, now Regions Hospital in St Paul, Minnesota, and for numerical analyses by Franz Halberg at the University of Minnesota. With independent validation of some aspects of the study in Italy and elsewhere, it remains the largest epidemiological investigation of breast cancer risk conducted from a chronobiological viewpoint, which led to numerous publications and several PhD theses. It was also the start of a treasured friendship that lasted a lifetime. Throughout the years, we had the opportunity to meet Teru in person not only at international meetings of chronobiology, but also in Minnesota, his second home. Teru's dedication to science until the end when he studied on himself the benefits of coQ10 will be remembered with respect and gratitude.